奥田あやと囲碁体験

指導者も必読！ ゼロから分かる

入門エッセンスセミナー

奥田 あや 三段

time 6

まずは皆さんにお知らせがあります。

本コーナーは当初、全６回の予定で始めたのですが、いざ開始してみると、お話ししなければならないことが予想以上に多く、ついつい進行が遅れてしまいました。

というわけで当初の予定を変更し、３回分を追加して全９回――12月号まで延長させていただくことになりました。どうぞよろしくお付き合いください。

そして内容に関してですが、７月号までで基本的なルールの説明を終え、先月号からいよいよ実戦編に入っています。まずはその先月号のおさらいから始めましょう。

先月号のおさらい

入門者が初めて打つ実戦としては、経験者と行なう九路盤での九子局（入門者が黒石を九子置いて始めるハンデ戦）をお勧めします。入門者同士でハンデなしの対局を行なうのもありだとは思いますが、２人とも初の実戦で戸惑うでしょうから、経験者がおられるのなら、その方に教えていただくのがベターでしょう。

九子も石を置いているので、少しくらいミスをしても黒＝皆さんの優位はビクともしません。ですから失敗を怖れることなく、気楽に実戦を楽しんでみてください。

第１譜　私が入門者の方と対戦した実戦譜です。九路盤をお持ちの方は石を碁盤に並べて、経過を追ってみてください。

白１に対しては「この白石を取ってやろう！」という気持ちで臨んでいただいて構いません。黒２から４、６という運びはその意志の表れで、文句のつけようがありません。素晴らしい立ち上がりでした。

しかし白７と打たれた時に「△がアタリ

Profile おくだ　あや

東京都出身。大淵盛人九段門下。平成16年入段。23年三段。東京本院所属。第27期女流本因坊戦挑戦者決定戦進出。第22期女流名人戦リーグ入り。第４回大和証券杯ネット囲碁レディース準優勝。

になった。次に白ａと打たれると取られてしまう」ことに気づいたのですね。

気づいたのは、素晴らしいことなんですよ。しかしこの瞬間、自分の石がアタリになったことばかりに気が行ってしまい「白を取りに行っていた」という本来の目的を忘れてしまったのです。

つまり白７に対し黒ｂと打てば、白三子を取ることができて大成功だったのですが、この入門者の方は――、

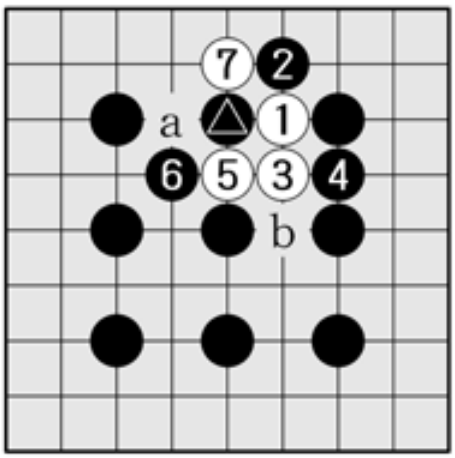
第２譜　黒８と打ったのです。黒ａと打っていれば白三子を取ることができていたわけですから、この黒８はベストとはいえませんが、しかし悪手でもありません。

というのも、この後の黒10の時でも12の時でも、黒ａと打てば、やはり白三子を取れていたからです。

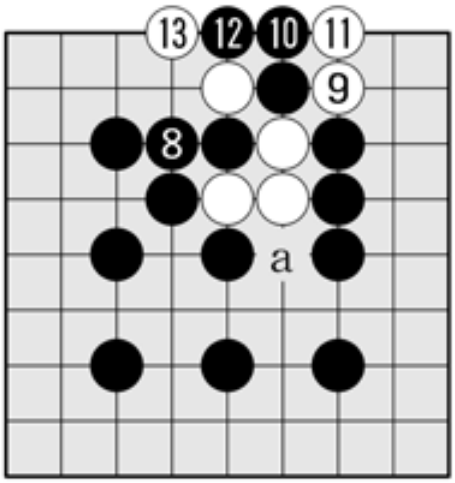
実戦は「白を取りに行っている」という本来の目的を忘れてしまったため、白13と逆に黒三子が取られてしまいました。

黒としては手痛いミスをしてしまったことになりますね。しかしここで、碁盤全体を眺めてみてください。

どちらの地が大きく見えますか？



第１譜



第２譜

★　編集室からのお知らせ　★

本コーナーでは、４月号から入門講座を連載しておりますが、今月号（９月号）以降よりご購読いただいた場合、内容が途中からになってしまいます。そこで本講座に限っては、幣院ホームページのトップ画面中段にございます出版最新情報から「囲碁未来」誌のロゴをクリックいただき、そこからこれまでの記事をＰＤＦにて確認できるようにしております。ぜひ新規ご購読者のみなさまにおかれましては、以下にまでアクセスいただければ幸いです。

上記のロゴをクリック

URL　http://www.nihonkiin.or.jp/publishing/mirai.html

囲碁はあくまで
地の多い方が勝ち！

1図　前ページの第２譜が終わった時点での局面です。この状態で碁盤全体を、改めて眺めてみてください。

４月号から繰り返しお話ししてきたように、囲碁とは「地が多い方が勝ち」というゲームですよね。取った石の数を競うゲームではありません。

その観点で１図の碁盤全体を改めて眺めてみますと「まだまだ黒が大優勢」であることが、誰の目にも明らかなはずです。

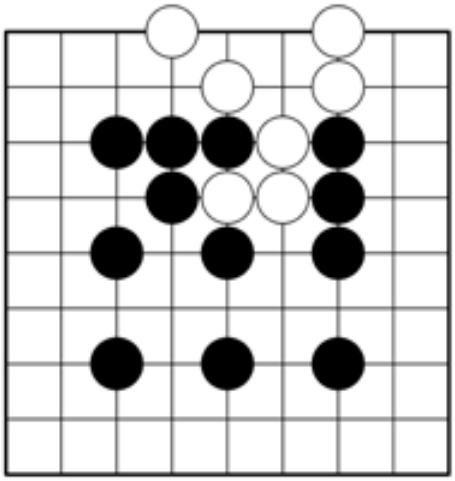
碁盤の上部（上辺）で黒は失敗してしまいましたが、白の地ができそうなのはここだけ。しかも大した大きさではありませんよね。

この「大した大きさではない」というのが大切なところで、翻って碁盤の下半分は、黒の膨大な地が出来上がりそうです。しかも上辺の白より十倍以上の規模と言っていいでしょう。

でも黒は石を三つも取られてしまったから……と思った方もおられるかもしれませんが、取った石（アゲハマ）を最終的にどう使うかを思い出してください。

そうです。「取った石で終局後に相手の地を埋める」のでしたよね。従って黒は現在、石を三つ取られていますが、これは即ち「最後に黒地を３目埋められるだけ」に過ぎないのです。

なので石を取られたことをクヨクヨと後悔することは、まったくありません。「三つほど石を取られたけど、碁盤の下半分は真っ黒じゃないか！」と胸を張るのが正しい態度なのです。九子も置いているので、そう簡単には負けません。



1図

指導者の方へ①

経験者にとっての常識は、入門者にとって「初めての体験」に他なりません。従って第１譜から第２譜にかけてのような進行はザラで、むしろきちんと白三子をポン抜いてくれることの方が珍しいと言うべきでしょう。第２譜は典型的な進行例です。

この時に指導者にとって大事なのが、本ページでお話しした「ここで改めて全体を眺めてみてください」と促すことです。入門者は「石を取られてしまった……」と動揺しているので、まずはそれを和らげてあげるのです。

すると「取った石の数を競うのではなく、地の多さを競うのだ」という基本を改めて噛み締めてくれ、この一局で気を取り直すことはもちろん、今後の上達までもが早くなるのです。

石を取られても大したことはない――この入門者さんが気を取り直して――、

第３譜　黒14から20と「自分の陣地を確保しよう」という方針に出たのは、実に賢明でした。

局後「この黒14から20までの手は、どういう意図で打ったのですか？」と尋ねたところ「これ以上、白に侵入されないようにと思って打ちました」という、百点満点の答えが返ってきました。

実際に私（白）は、これで大いに困っています。このまま穏やかに囲い合っていては白の負けが必至なので、無理を承知で白21と下辺に突入していきました。

と、ここまでが前月号でしたね。

左下も荒らされたが…

第４譜　この後の進行です。

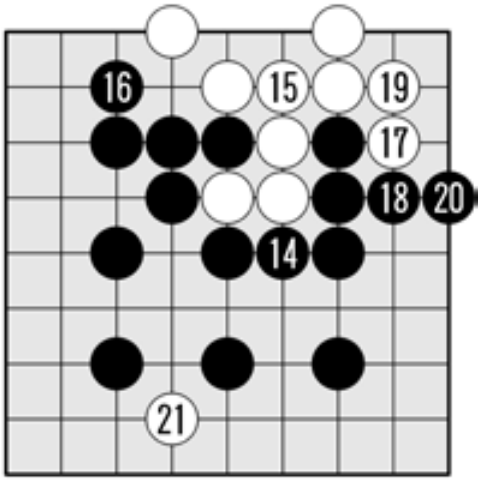
白31となって「あ！」ということになってしまいました。

こうなることを避ける手段は、ここに至るまでの手順中でいくらでもありましたが、それをお話しすると入門講座ではなく「技術講座」になってしまいますので「黒22では23の方が△を取れる可能性が高かった」と指摘するに留めておきましょう。

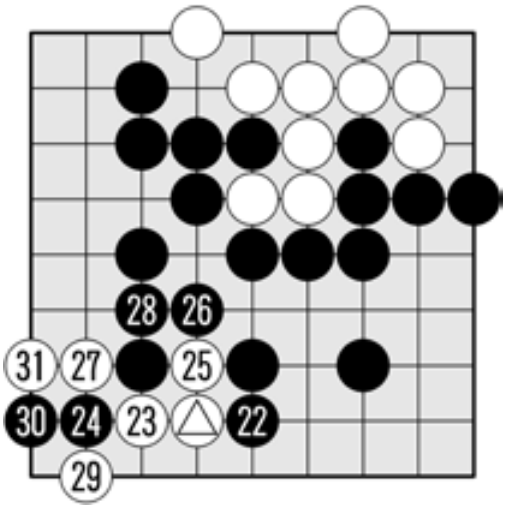
現在は「どうなれば対局が終わるのか」という点に絞って話を進めているので、皆さんは第２譜が終わった時と同様にもう一度、碁盤全体を見渡してみてください。

すると「左下隅でまた黒二子を取られてしまったけど、まだ勝負としては負けていないのではないか？」と思えてくるのではないでしょうか？　なんと言っても右下隅に、黒の莫大な地ができそうですからね。

この点を踏まえて黒は、この後をどう打ちますか？



第３譜



第４譜

指導者の方へ②

第４譜、左下の白が死に残りであることはお気付きでしょう。

しかしここで「石の生き死にというのがあってね――」とやってしまうと、初心者はもうパニックです。

そこをグッと我慢して、今は「終局を理解してもらう」ことのみに専念してください。死活を教えるのは、まだまだずっと先なのです。

第５譜　再び気を取り直し、黒32、34と左上に黒地を作ろうとしたのが、これまた非常に賢明な方針でした。

白35に黒36とオサえたのも「右下方面にこれ以上侵入されることを防ぐ」意味で文句なし――右下にも相当な大きさの黒地が確定しました。

白37は「左上に食い込んで、黒地を減らそう」という意図です。それを食い止めようとする黒38は、目的としては正しかったものの、具体的手段としてはミスでした。

続いて白からどんな手があるか、お分かりになりますか？

第６譜　白39という手があるのです。これで△がアタリになっているのですね。

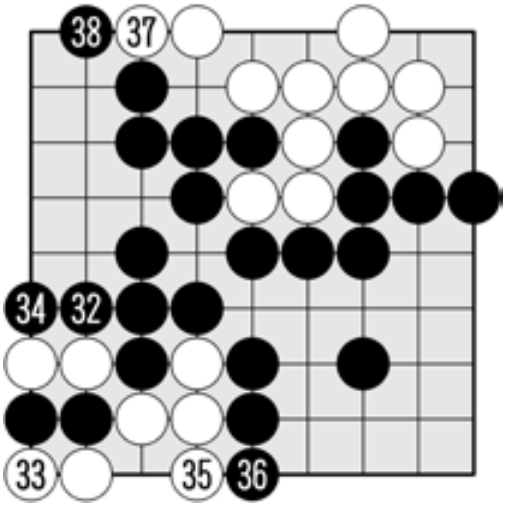
したがって黒は41と逃げたいのですが、白ａで大きく取られてしまうので、もう△は逃げることができないのです。

従って黒40として白41の抜きを許したのは仕方がありません。さかのぼって黒38では、39とユルめておくのが正しい応手でしたが、入門したてのうちにこうしたミスが出るのは当然です。

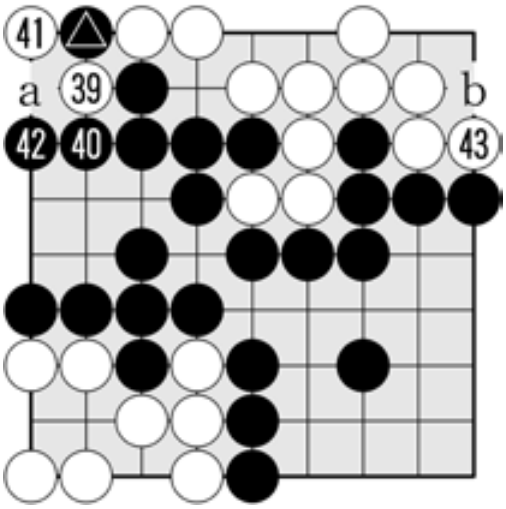
むしろ実戦でこのように痛い目に遭って「なるほど、こういう所は、こういう手があるのか。ならば～」と成長していくものなのです。冒頭で「どんどん失敗してください」とお話ししたのは、こういうことなんですね。

白43は白地を１目増やした手です。もし黒から43と打たれると白ｂが必要なので、白地が１目減ってしまいます。

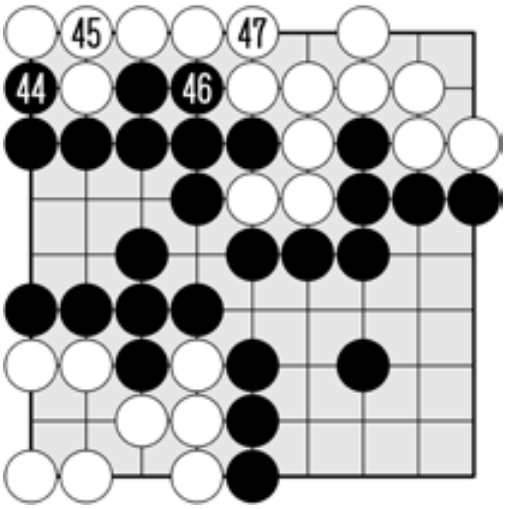
第７譜　黒44から46とアテると、白は47が必要。47の部分の１目を減らすことができました。つまり黒46を打たないでおくと白に46と打たれ、47の部分に白地が１目できてしまうのです。



第５譜



第６譜



第７譜

「双方がパス」で終局

実は第７譜が終わった時点で、この入門者さんは、戸惑った表情を浮かべました。

どうしたのか尋ねてみたところ「もう打つところがないような…」というようなニュアンスの言葉をおっしゃいました。

そこで私は「打つ所がないと思うのならば、パスをしてください。もし何か心配な箇所があるのなら、そこを守っておくというのも一つの手です」ということだけお伝えしました。

するとこの方はしばらく考えて――、

第８譜　黒48と打ちました。

理由を尋ねると「なんとなくこのあたりが心配だったからです」とのことでした。

そういう理由であったのなら、この黒48は立派な一手であるのですが、厳密に言えば、必要ありませんでした。なぜなら白に48と打たれても、黒ａと打てばその白一子をポン抜くことができるからです。

そして黒48について見逃せないのは、この一手が打たれたことで、

・黒地が１目減っている

という点です。黒48がなければ、この地点に黒地が１目できているわけですから。

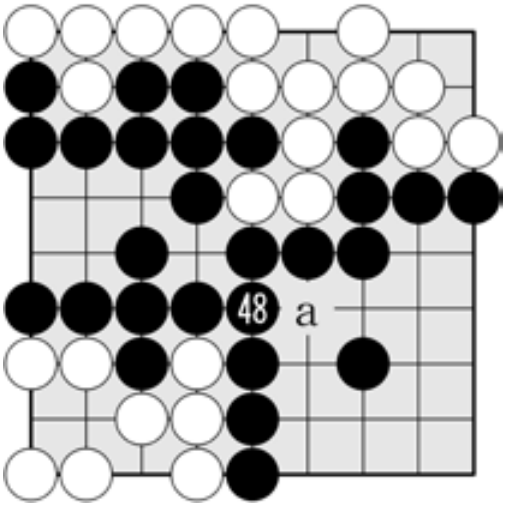
従って黒48が必要ないのなら、打つべきではありませんでした。黒48では「パス」が最善手だったのです。

黒48に続いて私はパスをし、対して黒もパスをしました。そして――、

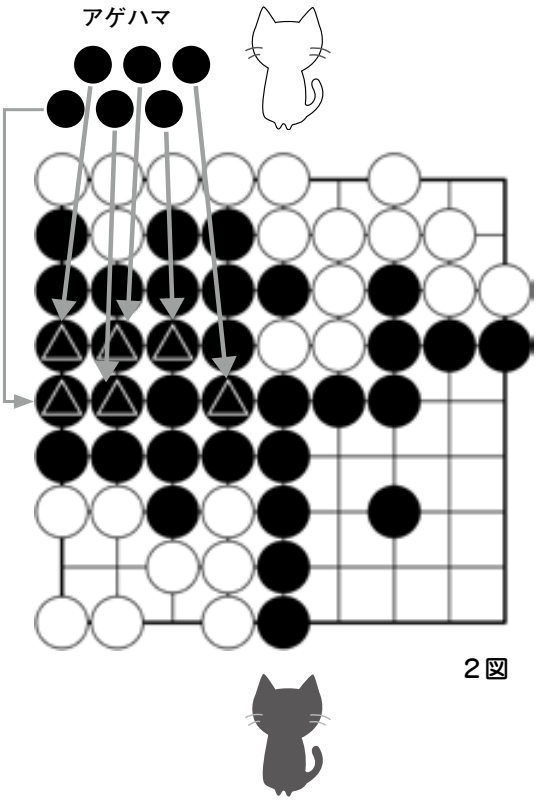
・両者がともにパスをしたら終局

というルールがあるので、この時点でこの対局が終了となったのでした。

あとは双方の地を数える手続きをするだけですが、白が取ったアゲハマが六子であるのに対し、黒が取ったアゲハマはゼロなので――、



第８譜



２図

２図　白はこのようにアゲハマで黒地を埋め、その結果を数えます。

黒地が17目で、白地が７目――黒の10目勝ちという結果が導き出されたのでした。

終局についての補足

囲碁入門において一番難しいのは「地の概念」でも「石の取り方や逃げ方」でもありません。

実は「いつになったら対局が終わるのだろう？」という「終局」を理解することなのです。

その点で「双方がパスをしたら終局」という定義は、とてもシンプルで分かりやすい言い方でしょう。一方が「もう打つ所がない」と思っても、もう一方が「まだ打つ所がある」と思ったら、それは終局ではないということですから。

実例を示しましょう。

3図　このような局面で、白は「もう打つ所がない」と思い、パスをしました。

しかし黒は「打つ手がある」と思っていたので、パスをすることなく――、

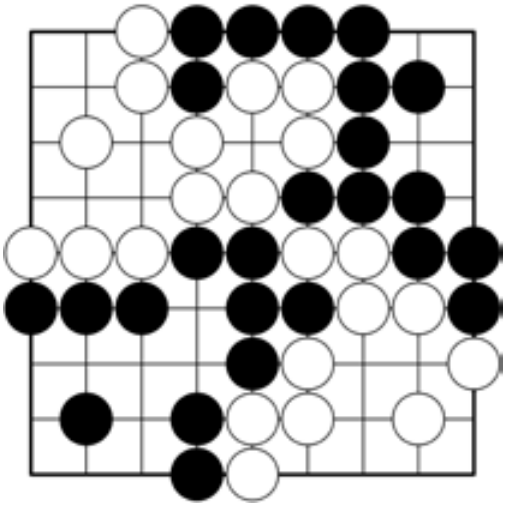
4図　黒1と白三子を取りました。白さんが「あ！」と叫んだことはもちろんですが、この黒1はルール上、何の問題もありません。気がつかずにパスをしてしまった白が悪いということです。

ではもう一例。

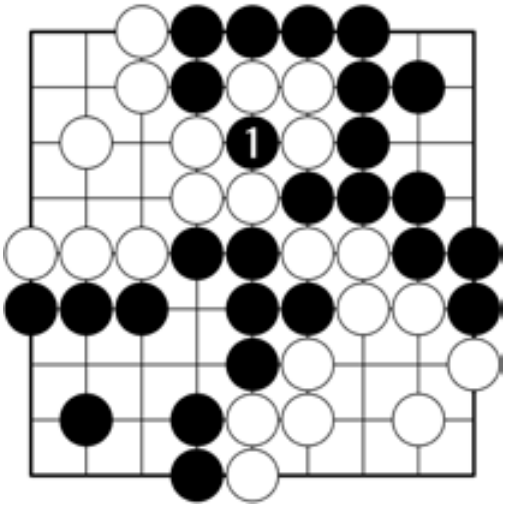
5図　白は「もう打つ所がない」と思ったのでパスをしましたが、黒は「左上の白地らしく見える部分に手を付けていけば、何かいいことがあるのではないか？」と思っていました。そこで――、

6図　黒1と打つことが可能なのは、4図でお話ししたとおりです。白が2と応じてきたので黒3、5とし「△七子を取ることができるかも」とほくそ笑んでいたのですが、白6で逆に取られてしまいました。

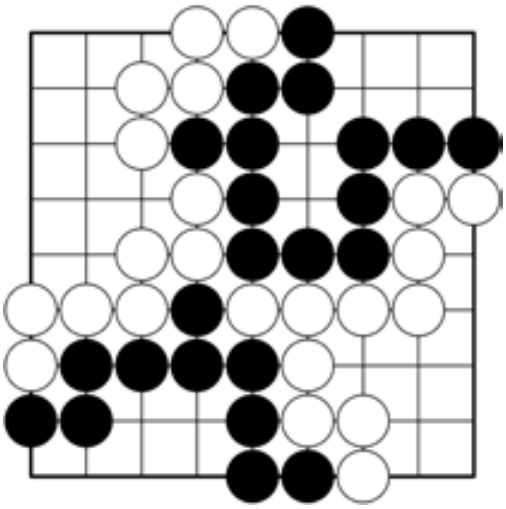
黒さんは「なんだ…そうだったのか…」と肩を落とし、ここでパスを告げ、白もパ



3図



4図



5図

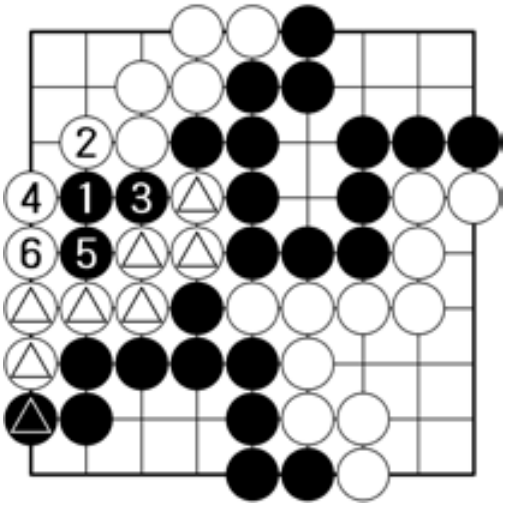
スをして終局――こういうこともありなんですね。繰り返しますが「両者がパスを宣言して、はじめて終局となる」のです。

とにかく実戦！
失敗の数だけ上達できる！

というわけで、今回は「終局」についてお話ししてきました。

３～６図で示したように、はじめのうちは「終局した」と思っても実はそうでなかったりすることがしばしばでしょうが、それでいいのです。対局を積み重ねることで必ず、終局のタイミングというものが分かってくるはずです。

上達のための特効薬があるとすれば、それは「実戦を数多くこなすこと」以外にありません。たくさんの失敗をすればするほど上達できる――そう信じて実戦を重ねてください。



６図

次回は、ハンデなしの「互先」の打ち方についてです。

指導者の方へ③

熱心な指導者の方ほど、一度に「あれもこれも」と多くのことを教えようとしてしまう傾向があるようです。

しかし「地の概念」と「ポン抜き」を理解したばかりの入門者の方にとっては、それだけでもう手一杯――そんなところへ「コウ」だとか「死活」だとか「手入れ」などを教えても、理解できるわけがありませんよね。

ですからまずは「どうなったら対局が終わるのか」――即ち「終局」を理解してもらうことだけに専念してください。それを理解してもらわないことには、何も始まりませんから。

従って前ページの３図で、白のパスに続いて、もし黒もパスをしてしまったら「それで終局」で一向に構いません。「両者のパスをもって終局」がルールなのですから、３図の欠け眼の部分を白地と数えてしまっていても、それはそれでいいのです。

そしてその状態で終局させ、勝敗を確認してから「実はね――」とアドバイスすべきでしょう。

対局を重ねて上達していけば、こちらから指摘しなくても自然と、コウの形ができれば「あれ？」と思うようになりますし、一眼の石があれば「これってもしかして――」と気づくものなのです。皆さんが思っている以上に、入門者は自分の力で吸収・上達していくものなんですよ。

教え過ぎには、くれぐれもご注意を！